



スポーツ選手の期間よりも その後の人生の方が長い

—桜戦士に学ぶ、スポーツの価値と神髄—

三浦捷也

(三浦歯科医院 院長)

近年、スポーツの政治的・経済的利用を推進力にした勝利至上主義、スポーツの商業化、ハイテク産業のスポーツ参入と、さらには東京五輪を追い風に競争も激化し、スポーツ環境は異常に肥大化している。こうした背景には、スポーツを観ること、スポーツを職業として観せることが発展を遂げ、スポーツへの関心の高まりが要因になっているように思う。サッカーのJリーグ、バスケのBリーグに代表されるようにスポーツはプロ化し、これまで頑なにアマチュアリズムを貫き通してきたラグビー界もプロへの道を模索している。アマチュアスポーツでも終局の目的はプロの道へという思想が強くなり、「スポーツ＝勝つこと」がスポーツの核心になっている。アマチュアスポーツでも、仕事の余暇を利用し、トレーニングした程度ではとても目的を達成できる状況ではなくなっており、今や学生スポーツでも肉体改造が当たり前になった。

「日本のスポーツ界が世界と肩を並べるにはプロ化の道を選択するのも当然の成り行きだ」とする関係者の考え方も理解できるし、プロ化への動きは子どもたちに夢を与え、スポーツ振興の大きな支えにはなっている。しかしながら、その一方で、勝利を殊のほか至上とする社会風潮をつくりあげ、その対象が年々低年齢化してはいないだろうか。

秋田県内でも「強ければいい、うまければいい」という考え方が深く浸透し、県内の小中学生のスポーツ活動にも変化が見られる。小中学生を対象に「甲子園球児を育てる、プロ野球選手の育成」を標榜し活動する団体や「トッパリーグで活躍出来る選手の育成」を目指す団体も結成されている。少年時代のスポーツは、本来子どもたちのところとからだの発達に応じて、誰もが楽しく経験できるような適切な環境が用意されるべきものなのに、現実には順位や結果を追い過ぎ、一部の能力の高い子どものみが手厚く指導を受ける状況が加速している。その背後には、その中からひとりでも成功者が出ればいいとする指導者の思惑や、大人の立場やエゴが優先する姿勢が透けて見えることも少なくない。

秋田県は「スポーツを通じた元気な活力ある秋田づくり」を掲げ、「スポーツ立県あきた」を宣言した。しかしながら、その目標が「プロスポーツでの活躍」「国体で好成績を上げる」「甲子園での勝利」とした考え方が根強い現状では、勝利至上主義がさらに増長するのではないか気がかりである。

スポーツは感動と出会いがあり、地域づくりや地域活動の文化向上に大きな役割を果たしてきた。県民あげてスポーツに取り組むことこそ「スポーツ立県あきた」が目指す方向ではないか。多感な少年時代に歪んだスポーツ体験、スポーツ観が培われたのでは、秋田県のスポーツ発展

秋田県内でも「強ければいい、うまければいい」という考え方が深く浸透し、県内の小中学生のスポーツ活動にも変化が見られる。小中学生を対象に「甲子園球児を育てる、プロ野球選手の育成」を標榜し活動する団体や「トッパリーグで活躍出来る選手の育成」を目指す団体も結成されている。少年時代のスポーツは、本来子どもたちのところとからだの発達に応じて、誰もが楽しく経験できるような適切な環境が用意されるべきものなのに、現実には順位や結果を追い過ぎ、一部の能力の高い子どものみが手厚く指導を受ける状況が加速している。その背後には、その中からひとりでも成功者が出ればいいとする指導者の思惑や、大人の立場やエゴが優先する姿勢が透けて見えることも少なくない。

は望めない。今こそ、教育の一環である学校スポーツに対する再検討と「スポーツ立県あきた」を実現させるためのスポーツ政策が必要だ。

肥大化し、華々しく見えるスポーツ環境は現在、理想と現実の狭間で混迷するスポーツの光と影が見え隠れしている。野球を例にとって考えると、最も深刻なことは「甲子園に行けば」「プロ野球選手になれば」幸せな人生を掴めると信じていることではないだろうか。野球少年やその保護者のあこがれであり、夢でもあるプロ野球の新人を選択するドラフト会議が毎年秋に開催され、テレビでも一喜一憂する模様が報道される。プロ野球球団のGMも経験され、長い間選手のスカウト活動にも関わってきた私の友人は次のように話していた。

「プロ野球ドラフト会議には、全国から精鋭が約120名登録されるが、その中でプロ野球選手としての在籍期間は5年間で50%、10年後には30%、生涯プロ野球界で活動出来るのは10%にも満たないのが実情で、かなり厳しい世界である」と。夢のない話になるが、こうした現実もしっかり認識しなければならない。

一方、かつて日本のアマチュアスポーツを支えてきた企業スポーツは、戦後長い間「五輪選手の畑」のような役割を果たし、スポーツ選手の職業として、大切な選択肢の一つになっていたが、最近は減少傾向にあり、不安材料の方が多いように思う。近年、スポーツ活動を中断しなければならない自然災害や思いもよらない異常な現象にも晒されている。さらにスポーツ選手には、怪我も付き物である。などなど考え合わせると残念ながら「スポーツで生計を立てられる可能性は限りなくゼロに近い」と言わざるを得ない。人生100年時代、選手の生活よりも

その後の人生の方が圧倒的に長い。どんな選手でもスポーツをやめた後の生き方が勝負となる。スポーツで経験したことをその後の人生に活かすことが大切なのだ。「甲子園」は目標であって目的ではない。元高校球児として、当時を振り返り、今はそんな印象を強く抱く。

ラグビーW杯で活躍をした福岡堅樹選手は、選手を退いた後は医師を目指すことを公言した。他の選手たちも、苦しい練習に耐えた貴重な体験を力に変えて、さらに人間性を高め、それぞれ人生の新たな高みに挑戦し続けるであろう。そこに勝敗、競争を超えた文化としてのスポーツの価値と神髄がある。

プロ化は飛躍的なレベルアップにつながるが、それでも私はスポーツの基本は、スポーツの持つアマチュアリズムの理念を大切にしたいと思う。ラグビーW杯での桜戦士たちの戦いぶりから、そのことを再認識した。

現在、日本では「スポーツ中心の学校」「勉強中心の学校」が多くみられる。得意なものに没頭させようとする親や教育関係者たちが、より良い環境をつくっているようにも見えるが、人間それぞれが持つエネルギーや個性をもっと様々なものに向けることが自然な姿なのではないだろうか。野球を通して長い間小学生と関わり、その後の子どもたちの成長を観察していくなかで、老婆心ながらそんな印象を強く抱くようになった。スポーツにおいて勝利は素晴らしいものだが、勝利だけでは不十分である。子どもに対する大人としての究極の使命は「子どもが幸せな大人になることを支え、見守ること」ではないだろうか。そのことを我々大人は今一度、しっかり心に刻み、それぞれの立場でスポーツに取り組む必要がある。